当センターの輸血適正使用加算取得の取組みと現状

◎廣田 悠里[1)]、石井 香帆[1)]、岩崎 篤史[1)]、清水 咲子[1)]、三ツ橋 美幸[1)]、武関 雄二[1)]、小野口 晃[1)]
自治医科大学附属さいたま医療センター[1)]

【はじめに】当センターは,2018 年 4 月から輸血管理料 I を取得している.しかし,輸血適正使用加算は FFP/RBC 比が基準の 0.54 を満たしていない為,取得できていない.2020 年初旬から新型コロナウイルス感染症が流行し,病院経営対策委員会から取得可能な加算や不必要な検査等の見直しが命じられ,対象となった輸血適正使用加算の取得は可能なのか検討したので,その取り組みと現状について報告する.
【対象・方法】当センターの輸血適正使用加算の未取得の原因は,FFP/RBC 比が 0.54 以上である.アルブミン/RBC 比は満たしているので, FFP/RBC 比の改善について検討した.まず,輸血製剤の実施状況やクリオプレシピテート（クリオ）製剤の使用方法の確認を行った.また,FFP の血漿交換が約 80 名/年行われ,FFP の使用に大きく関係する.製剤の関係するアルブミン/RBC 比は 2 未満で問題なかった.
【結果】FFP/RBC 比は 2020 年：0.76,2021 年：0.64,2022 年：0.69 であった.アルブミン製剤/RBC 比は 2020 年：0.37,2021 年：0.32,2022 年：0.36 であった.輸血前後の検査値を調べたが,ほとんどが問題なく適正に使用されていた.但し,救命救急センターに搬送される交通外傷,大動脈破裂等の大量出血患者は多数来院する為,適正使用を逸脱する場合が多々あった.クリオ製剤の使用は,2020 年：660 単位,2021 年：656 単位,2022 年：968 単位であった.また,血漿交換療法で使用した FFP の量は 2020 年：2.844 単位,2021 年：1.890 単位,2022 年 3.656 単位であった.【対策】輸血管理委員会や外科の診療連絡会議で不必要な輸血の依頼と過多輸血量の削減を依頼して周知徹底した.また,クリオ製剤を使用する心臓血管外科,救急部,麻酔科に適正な使用を周知した.【まとめ】当センターの輸血製剤の適正使用は,ほとんど問題なく行われており,クリオ製剤・血漿交換の患者数は増加しており,FFP/RBC 比の改善は難しい結果となった.今後更に適正使用加算取得条件を満たせるように努力したい.特に,FFP による血漿交換療法をアルブミンで代用できないか注視したい.しかし,当センターは大量出血の救命患者が多く運び込まれる施設の為,現時点の基準では輸血適正使用の継続的な加算取得は難しいのが現状である.

連絡先：048-648-5371